

茨城の言語文化

山口 正

私は言語文化という言い方をして、文学と限定しない広域の言語表現について考えたり、書いたりしているが、この用語を誰が使いはじめたか、まだ調査したことがな
す。

けれども、戦中に私が関係していた或る研究所が、発展的解消をして新しく生れかわるとき、この語が出現して、とうとう言語文化研究所なるものが財団法人として発足した時の事情を、昨日のこのように記憶しているので、次のようにいうことができると思うのである。

西尾実先生がしきりに頭をひねりながら、この名前をつけて、列座の人々が賛成したのだった。なるほどびったりだと感心し、私は今も東京渋谷に残っているその研究所に、年に一度ぐらい顔を出している。

茨大の地域総合研究所ができるとき、その設立趣意書と所員志望者心得のようなのが人文学部からまわってきた。見ると、地域のことを総合的に調査研究しようという機関なのに、学部関係の言語・文学畑から誰もはいっていない。私は、これではいけないと考えて、さっそく所員を志願した。

与えられた部門について、私は言語文化という命名をした。最初の年報に、地域社会と言語教育との連関について書いた。月例発表会で方言の見方についてと、鹿島地区での言語交流のことについて、調査したことを発表した。

茨城新聞から頼まれていた雑文を、一年間は「茨城の言語文化」と銘打って連載した。第一回は伝統文学の中の筑波山についてだった。作文のことや長塚節など郷土文学のことを書きつづけた。

編集長曰く、なるほどこの標目のもとならあらゆる問題が含まれますね、と。私は「言語文化」第一号として、研究室レポートの意味でパンフレットを作った。

一昨年春茨大で開催した上代文学会全国大会において、「古典教材と郷土文学」の発表をするために、県下の学校を対象として「古典の扱い方」に関するアンケート調査をやったが、そのとき集計された調査内容について中間報告をしたのであった。

「言語文化」第一号として誠にふさわしい内容であったと思う。

第二号も、やはりアンケート調査「方言意識」の問題でまとめられるはずで、目下そういうことに関心ある学生の力を借りて整理にかかっているのであるが、私は自分の定年退職を間近にひかえてから始めたことを後悔している。(あとをついでくれる第二走者がうまくできるかどうか、心配している次第。)

「ふるさとの文学、その茨城編」を企画し且つ編集を引き受けたのも、私の言語文化観は広くて、郷土文学もその中に入っほりとはいつてしまうと思っただからであった。

さて、煩をいとわず由来を述べてきたが、二十六回目の桜桃忌を機として『惜別』を改めて読み直してみても、感動を覚えたことがあるので、そのことを書いて結びとしよう。

太宰治がこの小説を書いたときの事情など言及したいこと多々あるのだが、ここにはその初めの部分を少々引用することから始めて、詩歌の朗読の問題にふれてみよう。

・・・私も無理に東京言葉を使はうとしたら、使へないわけではないのだが、どうせ田舎出だといふ事を知られてゐるのに、きざにいゝ言葉を使つてみせるのも、

気恥かしいのである。これは田舎者だけにわかる心理で・・・

というあたりは、もっとくわしく紹介したいのだが、このくらいにして先へ進もう。主人公は「日本の東北地方の農村に開業している一老医師」で、仙台医専の同級生、魯迅とめぐり会う場面の一節だが、その「私」は松島見物に出かけて或る山の中へ分け入る、すると仮睡の耳へかすかに歌声がとどく。歌の主は魯迅なのであった。

瞬く間には、山をおほひ、

うち見るひまにも、海を渡る、

雲てふものこそ、くすしくありけれ。

雲よ、雲よ、

雨とも霧とも、見るまに変わりて、

あやしく奇しきは、

雲よ、雲よ。

という小学唱歌「雲の歌」を、「歌の主ははばかりとところなく何遍も何遍も繰りかへして歌ふので」ある。

これは作者もいっているように、歌の練習をしながら日本語や日本文化に接近し習熟しようとしているのであったに相違ない。

魯迅はそのとき、練習ぶりを見られて、「白晳の顔を真赤にして、あははと笑ひ大いに照れるのだが、その様子を想像すると、若き日の世界的文豪が日本の山の中で、音痴に近い歌い方ながら、熱心に勉強している姿が黄金のように輝いて見えるようだ。

作文を読むのを聞いても、学生に読ましてみても、上手だなといえるようなに出会うことが殆どない。声優のように巧みにやれというのではない。自然な発声で

自然な抑揚がついた自然な調子でやればそれでいいのである。その自然さが困難だといふのなら、練習をしたらよからうに、この頃は音読ということをやらないのか、実に下手なのだ。

長塚節研究会が発足したとき記念講演会をやったが、「土」の朗読が朝日講堂、いっばいの聴衆を魅了した思い出は鮮やかだ。しかもその読み手丹阿弥谷津子の読み方は、方言などの微妙なところで不自然さを免れないものだった。

英大で「土」の朗読会、「絨の如く」の鑑賞会などが、何如に盛んとならないか。これはひとつ衆智を集めて考えてみなければならぬ問題であるようだ。